季刊 連句 第19号

昭和六十二年十二月一日発行

季　刊　連　句　第19号　目　次

歳時記について（南柏雑記　17）…… 1

俳句と発句 …… 草間　時彦 … 2

「市中は」の巻　鑑賞（V）…… 東　明雅 … 4

第四回　武翁賞発表（昭和六十二年度）…… 8

「蓑虫」付勝練習二十韻 …… 12

第七回　俳諧芭蕉忌　第二十三回　猫蓑会 …… 14

第一部　正式俳諧興行　脇起り二十韻　初時雨

第二部　脇起り二十韻　六巻

捌　梅田　利子　下坂　元子　下鉢　清子

滝川　雅代　原田　千町　山崎　一恵

文　豊田　好敏　副島久美子　上月　淳子

鳴立庵新庵主入庵記念祝賀会 …… 20

こよろぎの集い …… 下鉢　清子

祝賀二十韻　秋麗ら　七巻

捌　草間　時彦　坂本　孝子　杉内　徒司　杉江　杉亭

鈴木春山洞　馬場　彬風　東　明雅

新庵主主催　膝送り歌仙　黄落期

柚子の里　柏連句会吟行 …… 北見さとる … 24

二十韻　四巻

捌　東　明雅　小林しげと

下鉢　清子　原田　千町

百韻を捌いて　関口連句教室 …… 秋元　正江 … 26

二十韻三巻

捌　内田　麻子　式田　和子　豊田　好敏 …… 28

連句会案内・雁帛往来 …… 29

表紙（猿猴）　宮　崎　龍火子

歳時記について 17

南柏雑記

雅

俳句の方では、今「季語」の再認識・再吟味が行なわれているようである。さしあたり角川書店の「俳句」が十月号に「最新季語入門 ― 季の魅力」の大特集を行なっているのはその一つの現われであろうが、その原因として、①俳人の急激な増加により従来の歳時記・季寄せの類の記述がまちまちで混乱がおこっていること、②時代の転化が急激なため、死語に類するものが多く、その代わりに新しいものが掲載されていないこと、③俳句が一時平句的になったその反動として季語の効果が認識されてきたこと、などがあげられるであろう。

これは連句にも一応通じる現象であるが、用いる歳時記が各人ばらばらでは、特に連句では具合が悪い。俳句は一句の中での効果が十分であれば、たとえ、それが或る歳時記では春になり、或る歳時記では秋になっていたとしても、その一句の価値にはあまりひびかない。しかし、連句はその一句だけで事が足りるわけではない。たとえば、歌仙の中、最も独立性の強い発句にしてからが、その用いている季語が三春の季語ならば、次の脇句では必ず、初春・仲春・晩春のように、その季節を定めなくてはならない。また、一度、季語が出たら、春・秋は三句までは続けなくてはならず、五句までは続けてよいことになっており、夏・冬は一句で捨ててもよいが、三句まで続けてよいことになっている。

この場合、季戻りということは許されない。それはたとえば、打越に晩春が出て、前句に仲春が出て、付句に初春が出るような、季節の進行と逆の関係で付けられることである。晩春・仲春の季語と言っても、その差は微妙であろうし、一例をあげれば、梅は初春・木蓮は仲春・桜は晩春と大低の歳時記にはなっているけれども、たとえば、信州などではこれが一度に咲いてその区別はない。だから、季戻りもあまり厳密には言えぬところもあるが、たとえばメーデー(晩春)の付句に立春(初春)の句が付くなどは、常識で考えてもおかしいのである。

私ども、A・C・Cや猫蓑や、その姉妹の結社では文芸春秋社版の山本健吉編「季寄せ」を使っている。それは三春・初春・仲春・晩春などを、はっきり明示していて、問題が出た時調べるのに好都合だからである。

俳句と連句とは異なるのであり、俳句の歳時記も問題が多いのだから、この際、新しい連句歳時記の必要性を痛感する。それは最も基礎的なものを中心に、あとは類推でやれるようなものを作る必要があると思う。

俳句と発句

草間時彦

現代連句のなかの発句がどうあるべきかについて考えてみたい。
　発句は連句の第一句である。第一句に過ぎないから、三十六分の一の力しか持っていないと考えるのは早計である。占めている位置は三十六分の一かも知れないが、その重要性は別段である。発句の在り方を考える前に、正岡子規以後から現代に至る俳句を見てみよう。
　正岡子規を考えるとき、明治の文明開化という時代を無視することは出来ない。正岡子規は明治の俳句革命の旗手であり、偉大な革命家だった。子規はたまたま朝敵の松山藩に属していたので、政治の面での仕事をすることは出来なかった。それで、文学の面の革命家になったと言ってよいと思う。それは俳句であり、短歌である。小説の部門でも活躍したかったのだが、残念ながら子規の力ではどうにもならなかった。革命とは旧勢力を打倒することである。俳句の場合の旧勢力とは各地の宗匠であり、俳諧師だった。そして、これらの人々が神格化し、偶像化していた芭蕉をたたいた。芭蕉に替るものとして蕪村を讃えた。
　子規は余りにも早く死んでしまったので、その革命は途次で終ってしまった。破壊のあとの建設にまでは至らなかった。もし、子規が長生きをしたら、彼は連句について何を言ったであろうか。そのあたりは大いに興味があるが、どうにもならない。
　子規から攻撃された旧勢力の人達は、芭蕉の本当の偉さを直視する能力が欠けていた。子規に対して、説得力のある芭蕉論を展開する能力を持っていなかったのである。もっとも、明治時代の文学理論から、どこまで芭蕉を解明出来たかどうかはあやしいものである。正岡子規の芭蕉攻撃にしても幼稚なものだった。
　私は明治時代における旧勢力の実態を見誤ってはいけないと思う。それは大勢力だった。そして、子規の日本派俳句は小勢力に過ぎなかったのである。昭和四年刊の改造社『日本文学全集』第三十八篇『現代短歌集・現代俳句集』を見ると高浜虚子らに交って月の本為山などの旧派の庵号を持つ俳人が十七名加っている。これを見ると、昭和になってからでも、旧派の力が如何に強かったかが判るものである。
　明治以後の連句が衰退して行った原因はいろいろあると思うが、私はその一因として次のことを考える。それは、西欧の文明が流れ入って来た明治。西欧文学は個の文学で

大正以後の俳壇の指導的立場にあった高浜虚子は連句には多少の興味を持っていたが、座興としてのたのしみ以上のものではなかったようである。大正から昭和にかけて、ホトトギスにあらねば俳句にあらずという一大権威を築いた高浜虚子である。その虚子の連句に対する態度は、ホトトギスの人々の連句への無関心を強要するものだった。

虚子の句で注目したい句がある。

＊川を見るバナナの皮は手より落ち　　虚子
＊茎右往左往菓子器のさくらんぼ　　〃

こういう句を一部の人は痴呆俳句であると攻撃した。私は痴呆という言葉に必ずしも賛成出来ないのだが、その門下の「早乙女の赤い襷にちよと惚れた」というような句になると、まさに痴呆である。その価値を云々するよりも言わなければならないことは、連句の発句にはならない俳句だと言うことである。俳句が即ち連句の発句であるということは「ホトトギス」の俳句の大衆化によって、もろくも崩壊した。発句の持つ格調の高さというものを、俳句は捨ててしまったのである。

昭和初期に富安風生が口語的発想の俳句を試みたことがある。

＊街の雨鶯餅がもう出たか　　風生
＊退屈なガソリンガール柳の芽　　〃

このあたりから、俳句は発句性を失ったのだろうか。そして、非発句の俳句が現代の俳句の主流となって来た。現代俳句は発句と平句の区別がなくなってしまっている。連句は個の詩であって、そこには座の文学という考えはなかった。もとより、座の詩という思想もなかった。連句という座の文学は文明開化の浪に乗ることが出来なかった。俳句の場合は、子規の革新、子規没後は河東碧梧桐の新しい俳句の運動があり、これは後に尾崎放哉や種田山頭火の自由律に発展する。そして、文明開化も落着いた大正に入ると、高浜虚子の守旧派が俳壇を制するようになる。つねに指導者がいて、優れた作者を生んで行った俳句にくらべて、連句の世界には卓越した指導者が居ず、優れた作家も生れず、徒らに老齢化して行ったのである。

芭蕉から明治まで二百年、あれだけの力を持っていた連句が明治以後、急激に衰えて行ったことは、もっと、いろいろの角度から探究してみることが必要のようだ。文学的でなく、社会現象として捉えることも一つの方法である。

余談になるが、明治以後の日本の芸術は、大なり小なり、西欧の影響を受けている。文学の場合、自然主義文学の影響を無視することは出来ない。それが、連句の場合、衰えたまま、大げさに言うなれば、無菌状態で冬眠していたのである。だから、現代連句は眼が覚めたばかりなのである。眼が覚めて動き出したばかりだから、汚れていない。しかし、このままというわけにはいかないであろう。型式もさまざまに乱れるであろうし、内容的にも多彩となり、日本文学以外の異文学が流入すると思う。又、連句界内部の人間関係も円満とだけではいくまい。これは余談だが、私はそんな気がしている。

句の平句としか考えられない五・七・五が俳句として通用しているのが現状である。

別の角度から見るならば、口語的俳句や平句的俳句によって、俳句は一般大衆に親しみ易いものになった。俳句が格調の高さを誇っていたのならば、一般の人にとって、俳句は近付き難いものとなっていたであろう。俳句の基礎的方法を学ぶことの乏しい俳人が増すに従って、俳句はますます格調の高さを失い、平句的になって行ったのが現代俳句の姿である。

そのことを具体的に言うなら、切字を使わない俳句が多くなった。切字を使えない俳人が多いということである。本来ならば、切字を使ってこそ俳句なのである。

連句の第一句は季題が入っていて、切字が使われていなければいけない。それでこそ、連句の第一句は発句であって、俳句なのである。連句の第二句以降の平句は、例え、それに季題が入っていたとしても、俳句にはなり得ない。野鴨の子は野鴨であって、白鳥とはなれないのである。平句が一句として独立したときは、雑俳となるのである。

現代俳句は混乱している。発句から絶縁した場に俳句が存在しているようだ。平句のような俳句、雑俳のような俳句、口語的発想の俳句、さまざまな俳句が多いなかで、連句人が俳句を学ぶにはどうすればよいか。本稿の命題はそれだったのであるが、さて、どういう返事をしたらよいのであろう。

私は、前に連句界も先々は混乱するであろうと書いた。隆盛になり、しかし、混乱している連句の世界で、猫蓑会が指導的立場にあるためには、どうあればよいか。それは連句固有の方法を捨てぬことである。それと同じことが発句についても言える。俳句固有の方法を守ることだ。私はそう思っている。

（終）

「市中は」の巻　鑑賞（Ⅴ）

東　明雅

ウ11　さる引の猿と世を経る秋の月　　蕉

ウ12　年に一斗の地子はかる也　　来

（雑。他の会釈）

（現代語訳）猿を相手に月を見てくらすしがない猿曳も年に一斗の地子は納めねばならないのだ。

（付心）猿曳の用を述べた、其の人の付。

（付味）「年に一斗の地子」と言えば、その暮らしの貧しさ、あわれさが想像される。前句との間に、しおり、ほそみが感じられる。余情付で言えば、「うつり」。

（転じ）打越は僧（釈教）であり、この付句は猿曳の生

活と、題材は変化しているが、わびしい気分は裏の八句目から続いている。

（補説）地子という語は鎌倉時代あたりから用いられた古い語で、後には毎年二季に、銭、銀、米、雑穀などで収めたという。この猿曳は田畑を耕して、その収穫の何割かを上納するというのではなく、彼のもつ土地（山林・宅地）に対する税の意で、米一斗分の銭で払ってもよいのである。「年一斗の地子」は貧しい猿曳の生活の実態を明らかにしようとする意味の付けではなく、むしろ猿曳というような人も、人間として生存するからには相応の課税を果さねばならぬという、世の姿を描いたもので、いわば渡りにくい世の観想と見るべきだろう。だから、「律義に年貢を納められるのは、それなりの喜びであり、一句には、そうした心意気のようなものが感じられる」（日本古典文学全集・連歌俳諧集所収）という解釈には賛成しかねる。ことに猿曳のおかれた当時の社会的地位を考えると、尚更わびしさが先に立つのである。あるとすれば、猿と猿曳とが一所懸命に年貢を納めるペーソスであり、おかしみである。

「湯殿は竹の簀子侘しき」の句からこの句まで五句、しっとりとした、さびの世界が展開され、猿蓑の最も猿蓑らしい一連ということができよう。それだけに転じはあまり大きくはないものの、句それぞれにあわれ、おかしみ、さびしみがこもごもで、一句ごとの細かな気分の推移を味わうべきであろう。

12ウ　年に一斗の地子はかる也　　来

ナオ1　五六本生木つけたる潴（ミヅタマリ）　　兆

（雑。人情なし）

（現代語訳）五六本の生木をつけた寒村の水たまり、ここは年に一斗の地子を出すのである。

（付心）其場の付け。前句に軽く添えた付け方で、裏八句目あたりからの緊密な付合の気を抜いて、名残の折らしい人情なしの句で変化を出した。前句に田舎の小百姓らしい気分があるので、辺りにありそうな景であしらった。

（付味）僅かに年に一斗の地子を納めるという前句の貧しげな余情を受けている。能勢氏は「うつり」と言っている。

（転じ）打越と貧寒な気分は似ているけれども、打越は観想の句であり、この付句は写生的な叙景の句となっている点に、新しい転じが出た。

（補説）この潴を水はけの悪い道に生木を人が通るため投げこんである所と見る説も多いけれども、次に続く三句が何れも道路と関係があるので、この句までも道と見るのは、具合が悪い。これは用材の脂を取るために、浸けてある小さな池みたいなものであろう。潴という難しい文字を使ったのは、二句あとに水という字が出たため、嫌ったものである。

ナオ1　五六本生木つけたる潴（ミヅタマリ）　　兆

ナオ2　足袋ふみよごす黒ぼこの道　　蕉

（雑。人情自）

（現代語訳）五六本生木をつけた水溜りの辺りは、黒ぼこの道も湿っていて、足袋をよごしてしまった。

（付心）起情の句。前句の場の続きで、前句にぬかるみの感じがあるので、それに付けた。

（付味）生木のつけてある水溜りを眺めながら、その傍の黒ぼこの道を通っていると、足をふみそこねて、足袋を汚してしまったという、前句の景を軽く受けて、人情の句にかえたものである。心付的なところがある。

（転じ）前句まで続いた、わび、さびの気分から離れ、軽い失敗を自嘲する気分がある。

（補説）足袋は現在は冬の季語であるが、それは天明ごろ以后で、元禄のころはまだ季語となっていない。黒ぼこは「くろぼく」とも言い、火山灰や軽石が風化してできた黒い土。

ナオ2　足袋ふみよごす黒ぼこの道　　蕉
ナオ3　追たてゝ早き御馬の刀持　　来

（雑。人情他）

（現代語訳）馬を飛ばしてやって来る武士の刀持に追い立てられて、黒ぼこの道で足袋をふみ汚してしまった。

（付心）向付。足袋をふみよごした人に対して、早馬を駈りたてる刀持をつけたもの。

（付味）心付的で、足袋をふみよごした理由を述べているようだが、句調がよく、すっきりした気分が感ぜられる。

（転じ）このあたり、ずっと貧しい、うら寂しい気分の句が続きすぎている。それを打破する為に、この颯爽とした早馬の武士とそれを一散に追う従者の凛々しい姿とを出したものであろう。この原句が「お馬にはやり持ひとり付ぬらむ」で、それが芭蕉によって、このように添削され、改案されたことは天野雨山の指摘する通りで、原句ならば消極的なわびしい気分がなお残って、結局、この作品の命取りになったであろう。だから、芭蕉は思い切って改案したものと思われる。

（補説）雨山は、足袋ふみよごす者を刀持と見ているが、これでは逆付（時間的に付句が前句よりも先）であり、次の付句が「でっちが荷ふ水こぼしたり」であるから、全くの扉付となる。（両方とも人情他）。これを通行人の自と考えても、なお扉付の気分は否定できないが、敢えて、それを犯しても、芭蕉は一巻全体の気分の変化を図ったのであろう。ここで、原句の「お馬にはやり持・・・」を付ける方が前句への付味はよいだろうが、一巻全体の活気が消失する。そのあたりを商量して、芭蕉はさぞ苦心し、頭が痛かったことだろう。

ナオ3　追たてゝ早き御馬の刀持　　来
ナオ4　でっちが荷ふ水こぼしたり　　兆

（雑。人情他）

（現代語訳）殿様の早馬のあとを追って走って来る刀持の勢に、丁稚はかついでいる桶の水をこぼしてしまった。

（付心）向付。刀持に対し、丁稚を付けた。

（付味）この句は昔から評判が悪い。露伴などは、「興も味も乏しく、前句と同じ床屋俳諧の祖となれるもの」とまで酷評しているが、中には太田水穂や能勢朝次のように「ひびき」の付けと見ている人もある。私には両者とも極端な言い方だが、伊藤正雄が「この三句、拍子にのりすぎ、風韻に乏し」という位が適切だと思われる。しかし、拍子に乗らねばならぬ理由があったことは既に述べた通り。

（転じ）このところは、昔から観音開きの句としてこの一巻中の瑕瑾とされている。「打越の士分の従者から、町人の丁稚へという人物の転換、また田舎道から都会の街筋への移動、さらに自、他の変化のある点などから、この付句も承認されたであろう」（日本古典文学全集・連歌俳諧集）とあるが、打越、付句の転じよりも、更に大きな一巻の転じがここでなされたことが、より大切であろう。

（補説）去来抄によれば「でつちが荷ふ水こぼしけり」は、初めは糞（こえ）であったという。凡兆が「尿糞のこと申すべきか」とたずねたら、芭蕉が「嫌ふべからず、されど、百韻といふとも二句に過ぐべからず、一句なくてもよからん」と言ったので、凡兆は水に改めたとなっている。

俳諧では、詩、和歌、連歌が取り上げなかった題材をもとり扱う態度で一貫している。これは、醜を醜として取り上げるのではなく、それを全体の美意識の中に取りこむのが蕉風の行き方であった。また糞では、ますます田野の景に近くなるのを恐れたせいもあろう。

ナオ4　でつちが荷ふ水こぼしたり

ナオ5　戸障子もむしろがこひの売屋敷

（雑。人情なし）

（現代語訳）戸障子を蓆で囲った売屋敷に、勝手に入りこんだ他家の丁稚が、井戸の水を汲んではこぼしながら運んで行く。

（付心）丁稚が水をこぼす其場の付け。

（付味）売りに出されている家が、それでも荒れ果てないように戸障子を蓆でかこってある、その景にはわびしさがある。主人は居なくても井戸の水ばかりは昔のままに清らかで、曽ては楽しく家人が使っていたであろう自慢の井戸を、今は他家の丁稚が遠慮会釈もなく、水を汲みこぼしているのを見ると、一層に人の世のあわれ、わびしさが胸にせまる。何でもない叙景の句であるが、しみじみした情感のただよう句となったのは、水を汲む丁稚と、蓆がこいの売屋敷の位の付けである。

（転じ）前三句が騒々しい句であったのに、ここでは一転し、しんみりとした句になった。

（補説）むしろがこひは、①雨戸も障子もなくなって、むしろで囲われている家。②建具を蓆で覆い包んだもの、③買い手が決まり人が覗かぬように蓆でかこった家という三つの解釈がある。③は問題外である。大体①の解が多いが、雨戸も障子もなくなった家を蓆で囲うか疑問である。むしろ、豪家が没落して、上等な戸、障子を惜しんで蓆で囲ったものと見るべきではあるまいか。

第四回　武翁賞発表（昭和六十二年度）

歌仙　該当作なし

佳作　水澄むや

井手欅晴捌

連衆　秋元正江・中川哲
　　　下鉢清子・中田あかり

二十韻　該当作なし

佳作　初懐紙

秋元正江捌

連衆　山口美恵・鈴木茂
　　　佐古英子

佳作賞状（副賞なし）

本年度武翁賞には、歌仙七篇・二十韻五篇の応募があった。選考委員は十一月十九日参集。慎重に審議したが、いずれも、武翁賞として発表するには不十分なものばかりで、残念ながら、賞の授与はあきらめざるを得なかった。

しかしながら、その中、歌仙「水澄むや」の巻と、二十韻「初懐紙」の巻とは、多少の瑕瑾はありながら、これを全く捨て去るには惜しいとの意見が一致したので、佳作として表彰することになった。

A・C・C、猫蓑など、年々に実力が充実しているのであるから、来年度こそは選考委員をあっと唸らせる秀作の出現を期待するものである。

選考委員

東　明雅
草間時彦
杉内徒司

歌仙　水澄むや

井手欅晴　捌

水澄むや鯉が雲食む神田川　欅晴
　ビルの谷間に淡い昼月　正江
菊かほる駒をぴしりと盤央に　哲
　下校の子らが小石蹴り合ふ　清子
ペンキ屋の脚立動かず油照り　あかり
　赤いアロハで飛ばすナナハン　哲
ウ
竹とんぼどこを向いても砂の紋　清
　別れのことば平気平気よ　江
「藤十郎の恋」は枕の灯消し　清
　保険会社の緞帳が下り　哲
半生のつくり笑ひが頬の皺　り
　浄閑寺にきてちょいと寄る庫裡　江
月天心納豆汁も啜りごろ　哲
　初松籟にくたかけの声　清
杣人の買ひし地下足袋図抜け大　同
　大和盆地を掘って掘りぬき　江
廃線に花降りかかるひとしきり　り
　春愁をよぶパイプオルガン　江

ナオ
きつねだな見ゆるとみんな駈け出して　江
　四時には開く銭湯の前　哲
スーと来てパーと消え去る店いくつ　り
　ピンチヒッターどれも凡退　清
嬰児は泣いて汗疹の数がふえ　り
　出窓に並ぶ焼酎の瓶　哲
平等に妻を愛せを信条に　江
　おっとせいめく夫の口髯　り
サーカスのコンビ組みたる命綱　江
　血盟団の旗は粛々　り
定宿の墨絵の月も薄れたり　清
　邯鄲をきく老い母を連れ　江
ナウ
吊し柿疎開の記憶つひきのふ　哲
　背競べした幹の古傷　清
切支丹屋敷のあたり雨もよひ　哲
　春の炬燵にまづは一服　り
ほろ酔ひの祇園丸山花明り　晴
　子猫いかがと届く回覧　哲

昭和六十二年九月六日
於　関口芭蕉庵

二十韻　初懐紙

秋元　正江　捌

隣より謡きこゆる初懐紙　正江
　飾納の古りし式台　美恵
ファミコンのソフト発売待ちかねて　茂
　塀いっぱいに漫画描く子ら　英子
木下道月の出を待つ人と犬（ウ）　茂
　かまきりを見てさめてゆく恋　恵
愛憎の糸の絡まるそぞろ寒　茂
　お縄頂戴金の延棒　子
スペインかカナダが終のマイホーム　恵
　プールの青に空の蒼溶け　茂
疼きゐし虫歯不思議に鎮もりて（ナオ）　恵
　新人類僧檀家殖やしぬ　同
許されぬ女が成果の留学生　英
　朝な夕なにくちづけが義務　茂
鴫の夢ゆらゆら揺れて月遠し　恵
　根雪となりて地酒温む　同
半世紀暮らし慣れたる街変り（ナウ）　茂
　春の公園草野球終へ　同
花篝ゆきかふひとを浮きたたせ　子
　きらめく針魚ならぶ大皿　恵

昭和六十二年一月十六日
於　電通南寮

連衆　山口美恵・鈴木　茂
　　　佐古英子

武翁賞応募　作品一覧

歌仙

			連衆
一	行く秋	膝送り	東夷　良子　遊　隆秀　好敏　定史　和子　淳子
二	落し角	麻子捌	哲　和子　美保　隆秀　亀　凡
三	師走風	麻子捌	和子　杉亭　東夷　遊　弘子　みづゑ　啓世
四	天壇	膝送り	香歩　啓世　和世　玲子　喜代子
五	牡丹	膝送り	遊　東夷　みづゑ　和子　好敏　良子　哲
六	夏衣	欅晴捌	蓼艸　隆秀　清子　まさし
七	水澄むや	欅晴捌	正江　哲　清子　あかり

二十韻

1	若竹	耕子捌	正江　治子　麻子　時代
2	風の道	美恵捌	茂　昭子　憲助　秀樹　碧　英子
3	初懐紙	正江捌	美恵　茂　英子
4	梅雨晴れ	憲助捌	美恵　泉　修一　篤　憲助
5	春惜しむ	美恵捌	篤　碧　茂

選後に

草間時彦

今年の武翁賞は応募作品が質的に劣っていた。残念だが、授賞作なしは当然のことである。

私は秋元正江さんの再授賞を主張したが、捌きの再授賞は避けたいという東、杉内両先達のご意見に従った。秋元さんの場合、同じグループを連衆として、他の人が捌いている作品の応募があったが、出来栄えに格段の差があった。連衆から佳い句を引出す能力こそ、捌きの第一条件なのである。

東明雅

歌仙の応募は七篇、その中二篇は膝送りであった。同じく膝送りと言っても、連衆の質が揃い、割に小人数のところは捌格の人が居なくても成り立つが、ベテラン、新人こきまぜて、人数も多いのは、どうしてもむらが目立って、安定性がない。これは今後もあることだから注意して貰いたい。四番のは亡き香歩先生の句が交じっているから番外として二・三・六・七はちゃんとした捌きが居られるせいか、その点の難は免れている。しかし、いずれも、それぞれ自他・内外がうまく整っていなかったり、余りにも強い個性が全体の調和を破っているような点が顕著であった。

二十韻の方は五篇、今年は電通の方が張りきって四篇を出して下さったのはうれしかったし、進歩しているのも認められたが、やはり捌きとしては3が、同じ電通のメンバーを連衆としながら一応纏っていることは、三人の斉しく認めるところであった。1は初捌きとしては上々で今後を期待する。

のものばかりであったが、賞なしでは残念であり、来年度からの応募の奨励にもなるので、歌仙、二十韻ともに各一篇を佳作として発表することで一致した結論になった。

杉内徒司

応募作品のリストをつくる。今回は十二篇にすぎない。膝送りが二篇、同じ捌きによる作品が二篇づつあるので、篩にかけて一つを残す作業を試みる。

まず、膝送り「行く秋」「牡丹」をよむ。双方とも八人と七人とによる膝送りのため、四つの面に区別がみとめられない一本調子。膝送りは五人位までなければいい作品が出来ない。七・八人でもすぐれた指導者が加わっていれば別だが。

「落し角」「師走風」双方とも連衆多数だが、捌きがいるので膝送りに較べてややよい。「師走風」を採る。

「夏衣」「水澄むや」、どちらも佳句が多く、変化があっていいが、「水澄むや」を採る。

二十韻では「春惜む」より「風の道」を採る。

二、三日後、残った六篇をよみ直し、「水澄むや」「師走風」「風の道」を推すことに決める。

さて選考日。一次選考で三人の推す作品が一致した。二次選考はやや難航。最終討議では、私は作品に現われていない日頃の力倆を力説して「水澄むや」を推したが、付方自他伝的にみると欠点もあり、受賞に到らなかった。

選考は一時間にすぎなかったが、一人の指摘に他の二人が同感を表すという審査ぶりで、連句に寄せる思いが一致しているのが自らわかって楽しかった。「水澄むや」が今年の準受賞作となったのは、武翁賞の幅を広くしたという意味で私は満足した。

蓑虫

付勝練習二十韻

東　明雅

投句締切
1月20日

脇起り

立句　蓑虫の音を聞に来よ艸の庵　芭蕉

脇句

治定　初めて涼し掛けし濡縁　正雄

1　夜寒の壁にうつる人影　正江

2　硯洗ひて据ゑし文台　隆秀

3　束ねて壷にさす吾亦紅　上月淳子

4　萩こぼしつつ訪へる柴垣　元子

5　桔梗活けて客を待つ床　妙子

6　わらぢの鼻緒ゆるびやや寒　良子

7　止まる雀にゆるる紅萩　治子

8　萱門くぐり苔の飛び石　弘次

9　ひとくくりして門の溝萩　遊

10　藍皿に盛る庭の無花果　哲

11　笹に挿しくる苞のなめたけ　鋭太郎

12　露時雨踏む畔の近径　井田淳子

13　昨日替へたる障子白々　千町

14　新酒一本下げて夜の道　天留子

15　休耕の田にげんげ蒔き終へ　慶子

※れた、蓑虫が鬼の捨子で、「八月ばかりになれば、ちちよ、ちちよとはかなげに鳴く、いみじうあはれなり」という有名な話から来たもので、実際は鳴かないというのは周知の通りであるが、芭蕉としては「栞集」や「一葉集」の前書にあるような情感で作ったものだろう。秋の夕暮、草庵の閑寂さを愛すと共に、心の友を求めた芭蕉の気持を察して、脇の句も応ずべきであろう。

1はまさに閑寂の心を現実の姿に現わしているが、あまり寒々として挨拶の意がないのが残念である。2の硯も文台も草庵から出たもので、決して身柄のある句とは言えないが、何か道具立が多すぎる。3の吾亦紅も寂しい花であるが、前句の艸に付きすぎていないか。

4・5も同じである。6のわらぢの鼻緒がゆるんだのは客のわらぢであろうか。おもしろい所に目をつけたが、やや前句への付味がわるい。7は虫に鳥、艸に紅萩で賑かすぎる。紅萩だと艶で前句の閑寂にあわない。8は萱はもちろん三秋であるから、発句が三秋の時は脇では避くべきである。9も庵に門、艸に萩では如何か、もちろん、脇の句は発句にべた付けでよいのだが、もすこし、余意、余情をとらえてもらいたい。10も景は分かるが、藍皿の印象が強すぎる。11はまた変った景をとらえたものである。主人が客を待っているのに、客はなめたけを苞にして来たという向付の手法であるが、すこし身柄（発句の余意・余情以外のもの）が入っているような感じがする。12秋の立句の場合、月が脇か第三に出るのだから、ここで露時雨を出されると

16 なんばんぎせる咲きいでし庭　千雪
17 秋海棠の咲ける庭先　杉亭
18 紫苑の揺れに潜るくぐり戸　みづゑ
19 秋の名残の尽きぬ盃　雅代
20 蔓たぐりして椀のにぎはひ　澄子
21 濁り酒あり母の手作り　あかり
22 萩散りかかる蒼き庭石　光子
23 紅葉かつ散る陶の蹲(つくばひ)　清子
24 庭の茂みのほのかなる月　徹
25 かすかなる糸ゆらす秋風　美和
26 蹲(つくばひ)の上光る白露　智子
27 松の手入もはや済みし庭　美鈴
28 木犀の香の匂ふ庭先　美幸

　この芭蕉の立句は貞享四年秋の作。この句の前書に「聴閑」とあり、「栞集」や「一葉集」には「草のとぼそに住みわびて、秋風の悲しげなる夕暮、友達の方へ言ひ遣はしける」と前書がある。「続虚栗」によれば、この句の次に嵐雪の「聞に行きて」という前書で、「何も音もなし稲うちくひて螽哉」という句が出ているから、おそらく、深川の草庵から嵐雪に贈った句だろうと考えられているが、伊賀上野の門人服部土芳が庵を結んだ時、元禄元年、芭蕉はここを訪れ、この句を贈ったので、この庵を「蓑虫庵」と号した。

　蓑虫が鳴くというのは、例の「枕草子」四三段に書か※

第三の月が出しにくくなる。13もよいが、障子白々というところに何か浮き浮きしたものが感じられないだろうか。14発句の存問に対する応答の句、それはよいが、新酒という語の感じがすこしはなやかではなかろうか。15は身柄がある（発句の余意、余情以外のものをもろ出している）。16・17・18は同じようにこの艸庵の庭の草花を出している。これは別に身柄がある句ではないものの、なんばんぎせる・秋海棠・紫苑いずれも美しすぎるのではなかろうか、19はよい気分だが、「尽きぬ盃」はやや付味が悪い。20の「にぎはひ」も同様である。21の「母の手作り」もやや身柄がある。22・23はよく似た句であるが、23も美しすぎる。24はこのままでは三秋の月である。25の秋風・26の露も、発句の三秋に三秋の季語を付けている。これらはもすこし工夫すれば何とかなるのが惜しい。27の松手入は晩秋の句だから、その点はのがれているが、蓑虫のぶら下っている草庵で、松手入をするとは位が違うような感じがする。28も同じで、発句の佗人の住む草庵に、甘い香りの木犀はやや不似合の気がする。

　治定の句は、蓑虫の音を聞きに来いと友に呼びかけているのに、お宅の濡縁に掛けると暑かった夏が去り、いよいよ秋めいて気持のよい感じがしますと、挨拶しているところがすばらしいので頂戴した。次は当然月の句を出すべきだが、新涼が初秋であるから、なるべくなら、中秋の月がよいのだけれども、三句、同じ気分・境地が続かぬようにするためには、あるいは三秋の月を使って一工夫するのも絶対に悪いとは言えない。頑張ってもらいたいものである。

第七回 俳諧芭蕉忌

第二十三回 猫蓑会

㈠ 次第

一、席入り （知司の指図により座見・座配の役）
二、配硯（はいけん） （重ね硯を配る）
三、供華（くげ） （花司）
四、執筆呼出 （宗匠）
五、文台捌 （執筆）
六、俳諧興行 （知司挨拶のあと連衆付句）
七、花前 （執筆）
八、献香 （香元・宗匠）
九、花の句披露 （宗匠・執筆）
一〇、端作（はしづく）り （執筆）
一一、吟声 （執筆）
一二、文台返し （執筆）
一三、挨拶 （知司）

恒例の芭蕉忌を十月二十一日（水）深川芭蕉記念館で修し、正式俳諧を厳粛な中に和気藹々と興行した。その後、二十韻六巻を首尾した。

参加者　三十三名

第一部　正式俳諧興行

　脇起り二十韻　初時雨

次第（下記）

役割（次頁下記）

第二部　脇起り二十韻　六巻

㈠ 木枯や　梅田　利子　捌
㈡ しぐるゝや　下坂　元子　捌
㈢ 口切に　下鉢　清子　捌
㈣ 振売の　瀧川　雅代　捌
㈤ 冬籠り　原田　千町　捌
㈥ 旅人と　山崎　一恵　捌

初時雨

東　明雅　捌

初時雨猿も小蓑を欲しげなり　翁
　冬構へする鄙の家々　杉亭
職人は一代修業を誇らかに　千町
　ゆっくり掩れる煎茶湯ざまし　正江
（ウ）お太鼓の形を月にたしかめて　和子
　桐のひと葉に彼の靴音　みづゑ
さされたる盃過すそぞろ寒　尚子
　ここは異国青き大地よ　麻子
擬装され航空基地の滑走路　あかり
　宰相レース誰も譲らず　淳子
（ナオ）沢蟹の苑の宴会賑やかに　清子
　軒はなれたる月の涼しき　正雄
待つ身にはトランペットの物憂くて　孝子
　五角にもなる恋の鞘当　隆秀
株暴落七銘柄は値の上がり　哲
　豆粉々にくだくすりばち　雅代
（ナウ）腰痛に電気治療を日課とし　久美子
　出開帳には老も楽しき　元子
大川に水脈きらめきて花びより　明雅
　北へ北へと帰る雁　執筆

(二) 役割

宗匠　東　明雅
脇宗匠　杉江杉亭
執筆　豊田好敏
知司　秋元正江
副知司　中島啓世
座見　中田あかり
座配　内田麻子
花司　副島久美子
香元　上月淳子
配硯　八角澄子
解説　杉内徒司

木枯や　梅田利子　捌

木枯やたけにかくれてしづまりぬ　翁
一斉に翔つほや鳥の群　利子
男衆は塀の半分修理して　好敏
子供相手に尺の説明　弥生
（ウ）京育ち月見団子もはんなりと　香
薄もなびく吾もなびかむ　久美子
笑ひ茸でくの茸喰ふ年増振り　澄子
寺に応挙の幽霊の軸　敏
芸大も百年たちて記念展　香
キャピキャピギャルのミニのスカート　生
（ナオ）ペルシャ湾石油引火を恐れつつ　久
月夜海亀産卵の浜　敏
ふり返り帰る姿のいとほしく　澄
娘を嫁がせて一人酒呑む　香
樹氷林時に陰りて粉雪舞ふ　澄
旅行カバンに入れし胃薬　生
（ナウ）惚け出した母の話に面くらひ　久
おぼつかな気に小猫泣き出す　香
十重二十重花懐に抱かるる　利
上り鮎待つ友釣の糸　敏

しぐるゝや　下坂元子　捌

しぐるゝや田のあらかぶの黒む程　翁
冬構して濡るる小庇　元子
珈琲の豆碾く音の軽やかに　孝子
ざっと読みたる今朝の新聞　正雄
（ウ）火の息を吐きて玉兎と機は飛べり　啓世
駈落の果敗荷の街　哲
記念日のサラダにきざむマッシュルーム　孝
バーボンをつぐ太い指先　哲
退院を喜び友の集ひ来て　雄
いつもひと言多いわたくし　孝
（ナオ）日傘さしまなじり決し炎天へ　世
京の梵妻鱧ねぎる月　孝
寄り添うて来しその宵の香妖し　雄
伜の部屋に貼ったマドンナ　哲
バイト代つぎこんだ株半値割り　同
雪男見る夢も幻　孝
（ナウ）鳥葬に空をかけゆく魂よ　世
終列車待ち子猫抱く人　雄
花の下太棹叩く撥さばき　元
若布したたる浜のさざ波　世

口切に　下鉢清子　捌

口切に堺の庭ぞなつかしき　翁
縄新しき霜除けの松　清子
有段者打つ石音も静かにて　明雅
寝箱の仔犬そっと撫でやる　正江
（ウ）望の月アールヌーボーガレの玻璃　みづゑ
刈萱分けて尋ねたる彼　杉亭
より添ひて菊吸虫となり吸ひぬ　ゑ
火伏の神の目鼻すりへり　江
暴落の株に自棄酒ワンカップ　雅
棚のへそくり寡婦の心痛　亭
（ナオ）あるじ顔してのっそりと蟇　雅
更衣してせいせいの月　江
海坊主のっぺらぼうをひもとして　雅
お先にお風呂使ってちょうだい　子
破れ鍋をあきらめて今町住ひ　亭
そっと開けたるホスピスのドア　江
（ナウ）高梢（うれ）の山鳩の声ものうげに　ゑ
ぞっき本など積める荷風忌　同
揺り椅子に刻の移ろふ花吹雪　子
よけつつ歩く春泥の道　亭

ゑびす講　瀧川雅代　捌

振売の雁あはれ也ゑびす講　翁
　息白くして飴しゃぶる子等　雅代
温泉(ゆ)の煙過疎の部落にたちこめて　徒司
　湖の細波よせるキャンプ場　彬風
　だまったままで以心伝心　弘子
(ウ)蛇の殻見つけし木立月しろく　麻子
オフィスラブ廊下の角のすれちがひ　風
　転勤辞令すべてジ・エンド　麻
電線に止まりし鳥がぁと鳴き　司
　総裁選び決まる竹下　風
(ナオ)暴落の株にあわてぬ未亡人　麻
　神棚祀る日課かかさず　弘
どっさりと栗が届きし宅急便　麻
　玉兎に向かひ感謝する猫　司
稲架陰でそっとふれ合ふ唇と唇　弘
　Uターン同志やっと結ばれ　風
(ナウ)マラソンの折返し点人の垣　司
　白酒の酔急にまはりて　弘
伊達眼鏡はづして仰ぐ花の枝　代
　蛙ぴょんぴょん跳びはねる土手　麻

冬籠り　原田千町　捌

冬籠りまたよりそはん此はしら　翁
　庭の芭蕉も霜除の藁　千町
子等の描くクレヨンの彩あざやかに　隆秀
　コーヒータイム焼きしクッキー　淳子
(ウ)月代に過疎となりたる湖の町　あかり
　妻呼ぶ鹿の声の響ける　よしえ
踊りの輪つぼまる時にぐっと抱き　り
　年上およし揉め事の種　子
漆刷毛女の髪を梳き固め　り
　酒弱くしてすぐ眠る癖　秀
(ナオ)振る賽が丁ばかりとはめん妖な　同
　レーニエ公の融けぬ長恨　子
バイパスに添ひ雛罌粟の揺れ揺れる　え
　むしを殺して籐椅子の月　子
総裁戦明ければ株が暴落し　え
　駅の乞食の大尽の夢　子
(ナウ)銭湯につかりしみじみ富士の山　秀
　自分史書かん鳥雲に入り　り
ひもろぎの花や枝垂れて笑まひます　町
　土の香高く田返しの人　え

旅人と　山崎一恵　捌

旅人と我名よばれん初しぐれ　翁
　思ひがけなく爐開きの客　一恵
幼らの毬つく音のはずみゐて　和子
　爪にからまる猫のじゃれごと　弘次
(ウ)見返りの塔上り来る月蒼し　郁子
　コスモス垣のかげの逢引　瑞枝
若すぎてヒモ持てあますそぞろ寒　和
　そばやの箸のささくれて割れ　瑞
話合ひ本音建前使ひ分け　弘
　ひとり虚しく金箔の酒　郁
(ナオ)津軽なる棟方志功記念館　和
　そろひの浴衣肌ぬぎの月　瑞
短夜の夢に妖しき女の来ぬ　和
　覚えなきまま認知迫られ　郁
海山を越え外国へ一っ飛び　同
　アタッシュケースに暴落の株　瑞
(ナウ)御祝儀とやたらにつつむ老の癖　和
　広き芝生に蝶のもつるる　郁
花小袖衣桁に掛かる公卿屋敷　恵
　朱塗りの籠飼ひぬ鶯　弘

正式俳諧執筆として

豊田好敏

十月二十一日午後三時、知司の「これで本日の猫蓑会正式俳諧を終了いたします。」という閉会の宣言を聞きながら、やれやれ無事に終って本当に一段落という思いで一杯だった。

七月のACCの或る日に「十月の猫蓑会の正式俳諧の折、執筆をやっていただきたい。」と突然のお話であった。三月の亀戸天神で拝見していたが、ともかく執筆はたいへんだ。「私なんかにできませんよ。とても荷が重すぎます」とお断わりすると、「特訓してあげる」とのことに、お引き受けしてしまった。

作法段取りのコピーをいただいて特訓二回。最初が九月十九日、南柏で、次いで十月十七日は深川の芭蕉記念館で本番さながらに行っていただいた。段取を何回も読みかえして臨んだためか、十七日のランスルーは自分で思ったより落着いて歌膝まで進行した。

懐紙の折を左手で文へ左膝の上に拡げ、右手で筆を構えたところへ知司が「本日の猫蓑会は時雨忌にちなみまして、翁の〝初時雨猿も小蓑を欲しげなり〟を発句に、脇起り二十韻で行います。なお本興行の時間の短縮を計り、本日は十句目まで進行させていただきます。」と宣言され、執筆は直ちに発句を懐紙にしたため、吟声ふた声。直ちに脇宗匠杉亭氏と連衆千町さんから「付け」の声が出たが、間一髪杉亭氏が早く、宗匠の治定の合図で「句あり」となる。次いで第三を千町さん、四句目は正江さん、折立五句目は和子さんが月の句と、リハーサル的雰囲気も多少手伝って、猫蓑会の錚たるご連衆から、とんとんとんと付句が出される。

知司から「付け勝ちで……」とのルール説明でも、暗黙のうちに一順を重んずる気配が感じられ、宗匠も付け句をぜひとも活かすべく、脇宗匠とご相談する。

さて本興行の十月二十一日、あれだけ入念なリハーサルを行ったにもかかわらず、私はすっかり揚がってしまった。その理由は『挙句』である。興行の段取では挙句は執筆となっている。〝しろさうし〟には、挙句はすぐ付けられるよう案じ置いてよいとのこと。障りがあるといけないので五句用意して鞄に入れておいたまま、気が付いた時には本興行の席入に突入していた。

さあ仕方がない。何とか思い出さなきゃと思っているうちに、宗匠から「執筆、執筆」のお声。もう出たとこ勝負と度胸を決めて執筆の作法から文台捌きの形に入ったが、落ち付けない。重要な作法を二つほどスッ飛ばしてしまひ、宗匠がお隣で小声で教えて下さっているが、引き返せない。てしまった。

のは哲氏だ。軽妙洒脱なお人柄で恋句を出し直して頂いた頃には、挙句を二句ほど思い出して、一応ひと安心した。

花前になって、その句を読み上げず「匂の花」と叫んだとき、ご連衆から「花前の句は？」との声が起ったが、私の方が作法通りだと自信を持って進行できるまでに回復してきていた。

それにしても、見ると行うとは大違いとあらためて背すじに汗の走る思い。さらに、本興行までに足の捻挫やギックリ腰などのトラブルで、先生はじめ皆様にご迷惑をかけないことを念じつつ、正式俳諧の本興行に参加できたことを、喜ぶ次第である。

花司のお役目

副島久美子

一月程前、東先生から正式俳諧の御役の一つ、花司をと御指名にあずかりました。夢にも思わなかったことで大いに慌てましたが、大先輩の式田和子さまに手取り足取りお世話頂き昨日、時雨忌に於ける正式俳諧の花司の御役を無事何とか果すことが出来ました。

日頃和服になじむことなく生活していますので着物を着なければいけないということが先ず頭をよぎり、どうなる事かと大いに悩みました。お花は何がよいかしらと度々花屋さんを覗いてみたり、又着物はどれに、帯は、など思案しながらも楽しい準備期間の一月でした。当日は事前にリハーサルをしてあったので、その時の注意を心に止めて思いの外落着いて一連の所作を滞りなく行うことが出来ました。

当然のこと乍ら見るのと実際にやるのとは大違い、正式俳諧に対する認識の深さが違って来ます。私の役の花司は元より宗匠、脇宗匠、執筆、知司等にそれぞれの役どころ、仕草をつぶさに見て頭に沁みこませることが出来ました。外の役の方達も自分と同じようにそれぞれの御役を務めているのだと思うと我が事のように親近感が湧き一体感を味うことが出来ました。いつもは普段着の気分で気軽に連句を楽しんでいますが、時折は盛装し改って正式俳諧に臨むのも昔の気分にひたれて一種懐しいような気さえしました。

因に、活けたお花は、枝物にツルウメモドキ、他にリンドウと白い小菊を使いました。最後に式田さん始め皆さんに助けられて花司のお役目を無事務めさせて頂きましたことを深く感謝致します。

香元をつとめて

上月淳子

今度の芭蕉忌の正式俳諧に香元をつとめる様にと先生からお話しがありました時、とても私には出来ませんと御辞退申しましたものの「誰にでも出来るよ。教えて上げるから」との御言葉に、乗りやすい私は、「それではさせて頂きます」と御返事してしまいました。それから改めて私に出来るだろうかと悩みました。もう雲の彼方のことになりますけれど、学生時代に聞香の時間がありましたので、その時のことを思い起したりして心の準備だけは致しました。

当日はお天気にも恵まれ、午後一時から正式俳諧が始まりました。席入、配硯、献花と進み、いよいよ執筆の登場です。新しい執筆の豊田様は恰幅もよし堂々たる執筆振り、文台捌きも鮮かに歌膝もきまっています。そこで「初時雨猿も小蓑を欲しげなり　翁」を発句として脇起りで俳諧興行が始まりました。正式俳諧も三度目となりますと、「付け」の声も次々と出、すらすらと始められ、そのうちに面白い句には笑い声も出て賑かな一座となりました。順々にすすみ香元のお役も曲りなりにも無事にすみ、都会の静寂とも云うべき芭蕉記念館の白い障子に木の影の時々揺れる広い座敷に、連衆が居並び、執筆の朗々たる吟声を聞いて居りますと、さながらタイムトンネルで江戸時代の俳諧の席にいる様な気分になったことでした。

御立派につとめられた諸役の方々の中で、頼りない香元で先生もさぞ、お目だるかったことと紙上をかりてお詫びいたします。

鳴立庵新庵主入庵記念祝賀会

こよろぎの集い

下鉢　清子

九月三十日、大磯町鳴立庵に於て当庵二十一世庵主を継承された、俳人協会理事長草間時彦先生をお祝いして、東明雅先生主催の連句二十韻の集いがもたれた。

由緒ある鳴立庵の経緯については『季刊連句』十八号「南柏雑記」に、明雅先生が「鳴立庵今昔」として詳らかにして居られるが、このあたりは古来「こよろぎの浜」と呼ばれ『万葉集』中、既に

　相模路のよろぎの浜のまなごなす
　　児らはかなしく思はるるかも

と歌われ白砂青松景勝の地として知られており、下って日本最初の海水浴場発祥の地と言われている。

当日十時過ぎ、柏連句会のメンバーと共に大磯駅に降り立てば、既に改札口には杉内徒司、福井隆秀両氏が居られ、そのまま庵に直行すると、お茶菓子の西行饅頭は受け取り済であった。受付開始前の僅かな時間に庭内を拝見する。大淀三千風一世庵主始め代々庵主の碑や茶室。虎御前の御堂の奥を覗くとふっくらとした頬の座像であった。庭の片隅に比翼塚と刻まれたのみの楕円形の石は、恋を天国で結ばんと、死を選んだ坂田山心中を悼んでの塚である。

十二時より受付開始、遥遥と四国よりご参加の鈴木春山洞氏や、猫蓑会の方々など三十一名が、新庵主草間先生をお迎えして、七グループに分かれて一時よりスタート。

今日の発句は、明雅先生の祝句

　主得て鳴立庵の秋麗ら

司会の徒司氏より場所柄を慮った「目出度い席であるが大磯でもあり、恋句として天国に結ぶ恋の出句のあった場合は？」などの応答も加えられる。取材の朝日新聞記者氏も釣り込まれて付け句、「面白いものですね。」の、賛辞の中に三時半、七巻満尾。

「この頃、連句が面白くなって来た。連句の会というと、用をさしくって行く。」と、言われる時彦先生、捌をされつつも、七巻全部に「花」の句を付けられた。

披講後、大磯プリンスホテルに場をかえて夕食の会。白波の打ち寄せるこよろぎの浜を借景とした、落着きのある一室の歓談は、先程の丁丁発止の緊張を忘れ去って、時の移るのも惜しまれたことであった。

草間時彦　捌

主得て鳴立庵の秋麗ら　明雅
月見団子を供へたる盆　正江
夜学子の足音高く走り来て　淳子
角封筒に母の筆あと　耕子
ウ 望郷の異国に住みて二十年　弘子
煙草吸ひつけ渡す一本　淳
年下の人可愛いがる悪い癖　弘
枯葦びしと折れる風音　淳
天皇の御全快待つ神の留守　江
犬の仔抱いて子らの寄りくる　同
ナオ 単線のレールに耳を当てをれば　同
西行気どり旅を重ねて　弘
蒸発の夫わたしが捨てたのよ　淳
ワープロ打って綴る自叙伝　耕
蚊遣焚く窓より仰ぐ月高し　弘
時の記念日和時計の打つ　江
ナウ 佳きことのあり酌みかはす甲羅酒　耕
かぎろふ港桟橋に佇つ　淳
花吹雪海はもとより真青に　時彦
畦塗すみし村の遠近　江

坂本孝子　捌

主得て鳴立庵の秋麗ら　明雅
　昼より集ふ賞月の客　孝子
聞き澄ますハープの音色木犀に　千町
　何を狙ふか横丁の猫　哲
（ウ）外厨馬刺をのせし益子焼　啓世
　山だしなれど愛嬌で売り　子
とても駄目ひと言いへば嗤はれて　幸雄
　名誉教授にたのむワープロ　世
バイブルの革の手擦れに黴かすか　町
　冷した酒に泛かぶ金箔　同
（ナオ）小津作品深夜雨ふり映画みる　世
　救急患者の脈も落着き　子
西麻布また改築しブティックに　哲
　心の証しと押せし実印　子
暖房の閨の裸身にとどく月　哲
　まだうっすらと蒙古斑あり　町
（ナウ）叱られてピノキオになる夢を見た　同
　いかなご釘煮さしたくろもじ　世
汐の香の夕べしきりに花散って　時彦
　蝶に追はれて旅人の行く　哲

杉内徒司　捌

主得て鳴立庵の秋麗ら　明雅
　昼月白く満ちし初汐　徒司
ほろほろと美酒をふくめばさやけくて　幸雄
　足袋新しく葉巻吸ふ人　さとる
（ウ）神の旅見送ってゐる髯の祢宜　あかり
　母校は遠く山のあなたに　雄
初恋は透明となり尚消えず　り
　早く電灯つけてちょうだい　る
ニョキニョキとビルが建つらし埋立地　り
　ＮＴＴ株へそくりで買ふ　雄
（ナオ）氷菓舐め町っ子とんびあちこちに　り
　パンダが跳ねる回り灯籠　雄
独居のあからさまなる夏の月　る
　男嫌ひは言葉だけなの　り
香港島畳が好きと抱き寄せ　同
　銀婚式はすでに過ぎたり　雄
（ナウ）三千風から時彦までの永き時　司
　囀づる鳥を見つけ喚声　る
花疲れ桧の香する縁借りて　時彦
　小道続きて霞む山稜　り

杉江杉亭　捌

主得て鳴立庵の秋麗ら　明雅
　床に掛かりし観月の軸　杉亭
榧の実のひとつふたつを拾ひ来て　麻子
　ハーブキャンデー口にふくませてる　よ
（ウ）街角にヴィオロンの音の流れくる　良子
　肩を寄せ合ふこよろぎの浜　秋景
坂田山比翼の塚に手を合はせ　亭
　小さき縞蛇出でておどろく　麻
朝茶の湯ひびの深まる志野茶碗　よ
　みたまやのあるつくばゐの奥　同
（ナオ）地上げ屋のいざこざ銃を振り廻し　麻
　國父國手に委ね給ひて　亭
寝転びて松籟を聞く城の址　秋
　Ｂ型の彼なにもかも好き　良
ナナハンに相乗り眺む冬の月　同
　寒稽古終へ練り酒の酔ひ　よ
（ナウ）曲折の昭和を生きて還暦に　麻
　子供弾みて蝶々を追ひ　良
初花も若木ばかりの新開地　時彦
　いかなご鯖皿に盛らるる　秋

鈴木春山洞　捌

主得て鳴立庵の秋麗ら　明雅
　ほっかり出でし円かなる月　春山洞
かぐはしき松茸膳をととのへて　好敏
　揺り籠の子の眠り守りつつ　庸子
ウ 新車得し後継ぎにして乗り廻し　隆秀
　黒潮寄する南（みんなみ）の磯　敏
ナイーヴに流るる髪を掬ひ撫で　洞
　タンゴの曲でぐっと抱きしめ　秀
鷹狩の鷹を拳に据ゑて立ち　庸
　ひろがり枯るる芒原なり　洞
ナオ 磧湯の岩肌尻の跡残し　敏
　叶ひし恋の昂りに酔ひ　庸
参禅の打坐三昧を市に隠れ　秀
　コレラの噂播きし旅人　洞
海亀の潜り消えたる月の波　敏
　産衣（うぶぎ）の乳児（やや）の欠伸小さき　庸
ナウ 大乃国綱受け取りし喜びに　秀
　交はす盃春日射し入り　洞
花過ぎの柿の葉鮨を昼餉にて　時彦
　峠の句碑にとまる白蝶　敏

馬場彬風　捌

主得て鳴立庵の秋麗ら　明雅
　あはれひとしほ今宵望月　彬風
厨辺に栗飯炊く香たち込めて　和子
　子ども大ども集ふ週末　香
ウ 暑さ避け木蔭に披（ひら）く和綴本　弘次
　源氏の君に惚るる風鈴　天留子
羅馬まで追ひ掛けて来て肩ならべ　香
　洋酒しこたま買ひし円高　和
着ぶくれてラッシュアワーのバスを待つ　彬
　軒した寒くうづくまる猫　弘
ナオ 阿と言へば吽と応へし仁王門　天
　陛下の御平癒お齢気にして　和
ナイターの月に誘はれホームラン　弘
　テレビ見ながら愛の短夜　彬
手枕に胸のふくらみたしかめつ　香
　昔のひとの浮ぶ面影　天
ナウ 俳諧の道は遥かに三百年　同
　春挽絲で唄ふ鶴亀　和
大磯の虎も出て舞ふ花の下　時彦
　野にも山にも霞たなびく　香

東明雅　捌

主得て鳴立庵の秋麗ら　明雅
　名月を待つこよろぎの浜　遊
茸飯味うすうすと炊き上げて　清子
　隣のピアノいつもバイエル　みづゑ
ウ 酔貴妃の玉三郎のあでやかに　よしえ
　熱きときめき抱かれし胸　ゑ
高層の窓に緑の灯の点り　遊
　宝籤売る町角の婆　同
尺を取る尺蠖虫の椅子にかけ　ゑ
　宰相レースおもしろく見る　え
ナオ 面会は謝絶糖尿病の猫　清
　南無阿弥陀仏忰みし声　え
丑満の鉄輪に寒の月冴えて　清
　女ざかりの五十ウン才　遊
ヒモはなしせめて頭の毛が欲しい　清
　雑草めきて暮らす人々　ゑ
ナウ 昔悪の報い必ずあらはるる　遊
　目刺頬刺白子干など　清
子供らの花いちもんめ花の下　時彦
　種袋つけ飛ばす風船　え

新庵主主催　膝送り歌仙

黄落期

十月十一日、草間時彦氏の御招待により、午後一時から俳句文学館で、五吟の歌仙が興行された。これは鳴立庵祝賀会に遠い四国から上京された鈴木春山洞氏に対する慰労の意があってのことと思うが、われわれ三人がその席に御相伴できたのは幸いで、愉快な一座であった。

公園やひともまばらに黄落期　春山洞
　朝夕(あした)べに高鳴くは鵙　時彦
月の膳まろきものより飾りゐて　正江
　会釈交はして坐る末席　徒司
優勝がきまり歓喜の応援団　明雅
　滴る汗を拭かうともせず　洞
(ウ)井戸深く麦茶を冷す壜を吊り　彦
　絡める紅の糸の一筋　江
枕辺に忘れ置きたるイヤリング　司
　幼き愛の遂にDまで　雅
安普請ふるへる窓のぴりぴりと　洞
　冬霞して立枯の松　彦
寒卵割って蕎麦食ふ月昏く　司
　胸に抱きし「ミミ」の骨壷　江
帰国するよろこびボートピープルに　雅
　貴婦人号はSLが牽く　洞
花莚真新しきを携へて　彦
　お重に詰めし栄螺鳥貝　司
(ナオ)掃きために春風の吹く毘沙門堂　江
　羽黒山伏兜巾鈴懸　雅
あたり芸大向ふから声かかり　洞
　酒屋の隣お風呂屋がある　彦
くくりたる漫画の本を積み上げて　江
　宮尾しげをの「団子串助」　司
労咳が漸く癒えし夏の月　雅
　恋にもだへて透き通る身よ　洞
別々にタクシー拾ひ訣れたる　彦
　總霊塔の辺綿虫のとぶ　江
村境ひ寒百日の丸木橋　司
　老齢年金ありがたきこと　雅
(ナウ)煙あぐ厨に小鯵料理して　洞
　調子の悪き換気扇なり　彦
モスクワの赤の広場の整然と　江
　建国祭を祝す式典　司
花大樹行きずりのまま瓢下げ　洞
　弥生の雨に髪濡らすなり　雅

昭和六十二年十月十一日
於　俳句文学館

水魚の交わり

鈴木春山洞

「水魚の交わり」という語がふっと思い出された。水と魚とが離れがたいように、非常に親密な交際・友情を言う語である。草間時彦先生の御言葉に甘えて俳句文学館に参上した。連衆は時彦先生の外、明雅先生・徒司先生・正江先生、皆様御練達の方々ばかりである。田舎者を暖く迎え取って連衆に加えて下さった。感激した。発句を求められ、去来の故事を憶い乍ら、覚悟して提出。うち「公園やひともまばらに黄落期」を立てていただく光栄に浴した。五吟膝送りである。都会風な生活感情の横溢は素晴しかった。皆様がなごやかで暖い明るい雰囲気を醸され、包みこんで下さるので、ホームグランドに帰ったような気持になり、のびのびした寛いだ気分で勉強させていただいたのは有難かった。行間の余白に声あり、何を伺っても、すぐに答が伺えるのは嬉しかった。時間の経つのを忘れ、連句を楽しみ、座を楽しみ、言葉では言いあらわせない深い感激・俳諧醍醐味を享受した。

柚子の里
柏連句会吟行

北見　さとる

九月二十日、柏連句会吟行が埼玉県毛呂山町の柚子の里に於いて行われた。十時半東毛呂駅集合、総員十八名。

明雅先生を中心に、杣平、櫸晴、しげと、譲介各氏他の大先輩に交り誠に面はゆいばかりであったが喜んで同行させて頂いた。

今日の案内役は民宿松倉荘の御主人秋葉暁江氏である。氏は文学に造詣深く、道中此の地にまつわる史実などの説明を伺うことが出来た。越辺(おっぺ)川や越生(おごせ)の梅林を左右に山吹の里にて小憩。ここは「七重八重」の乙女と道灌出逢いの所とか、乱れ咲く八千草の間に山吹の返り花が可憐である。次に訪れたのは名刹龍穏寺、この山間いの禅寺には太田道灌父子の墓がある。逆縁の碑の回りには此処にも山吹の花がほつほつと木洩れ陽に泛んで恰も供華の如きたたずまいを見せている。この里は室町の戦乱時代を多く旅に過ごし連歌の全盛期を現出させたと言われる飯尾宗祇が土地の人々と「川越千句」を残したところと伝えられている由。

二十韻四巻

青柚　　東　明雅　捌

降り立ちて青柚の香のまづ匂ふ　明雅
　月の出を待つ草庵の夕　暁江
心字池秋水絹のごとくにて　さとる
　観鳥会の群の賑か　亘恵
(ウ)子供たち「はないちもんめ」誦へつつ　利子
　一言主に恋のお百度　同
草津の湯直らぬ傷と知りながら　る
　遠くに見ゆるクラブ振る影　恵
ももんがの巣は樅の木のてっぺんに　る
　熱燗によき味噌のこんにゃく　江
(ナオ)核持たず大らかに生く尊さよ　子
　テトラポッドで防ぐ侵蝕　江
しどけなくよりかかるる夢うつつ　恵
　お臍のあたり藪っ蚊が刺す　子
夏至の月相続税をいかにせん　江
　賽の磧をただ渡る人　同
(ナウ)神童と云はれし友も老いはてて　雅
　子持ち鯊釣る声の川岸　子
家の鍵三つ四つ帯に花の旅　る
　新入社員みなり正しく　恵

山吹の里　　小林しげと　捌

山吹の里や水車の秋の声　しげと
　段々畑を照らす月かげ　杣平
土瓶蒸柚の香りもきはやかに　妙子
　仕切はずして座る連衆　弥生
(ウ)窓越しにゴルフキャディの日傘さし　平
　ひとの気知らずまとひつく蚋(ぶと)　と
煩悩の葷酒を禁ず龍穏寺　子
　国際電話恋をささやく　平
ぬくもりをしかと肌身にペンダント　生
　手錠をされて入る警察　と
(ナオ)計算機誤りたるか疑はし　生
　通学バスの止みし時雨時　同
はやり風邪鴉が川の彼方より　子
　四畳半にて交す色酒　同
きぬぎぬの月を眩しく別れたり　生
　太郎稲荷の裏の藁塚　と
(ナウ)敬老日テレビ体操はげみをり　子
　尾を振る犬にわける赤飯(こはめし)　と
うち連れて松倉(まつぐら)訪はん花の頃　平
　ただ一面に陽炎の立つ　生

道灌ゆかりの江戸築城の野積石、今を盛りの曼珠沙華、むささびの巣などが印象に残った。又、永平寺との関わりも深く往来のあったことも聞く。昔修験者が辿ったという道を揺られながら桂木観音へ、この辺りは桂木柚子の産地として有名な処、未だ真青な柚子をたわわにつけた木が見渡す限り道の両側につづいて仄かな香りを漂わせている。これから冬至の頃まで文字通り黄金の山となると言う。昔盛んであった蚕飼の最後の一軒も今年限りとか、桑畑の緑が一層身に沁みる。山頂の観音堂は境内共荒れ果てており再建を願う心や切であった。晴れた日には都心のビルも眺められる由である。

一時近く海抜二百米の山腹の一軒屋松倉荘着。柚子山を背に三方展けた秋風颯々の広間に集う。腹が減っては戦は出来ぬと早速手打うどんに舌鼓、亭主心づくしの地酒の一升瓶のゆきかう中、四巻の満尾。披講の声に笑声も湧く。五時過ぎ各々の一巻を反芻しながら、頂いた青柚子を掌に里へ下り帰路につく。黄金色の柚子山となる頃再び訪れてみたい思いにかられた。

新秋の一日、有意義で楽しい吟行会に参加出来たことは何よりの喜びであった。

秋の七草　下鉢清子　捌

居ながらに秋の七草松倉荘　清子
　名月を待つ鄙の濡縁　郁子
方程式解きかねてゐる夜寒にて　欅晴
　熱き番茶にカステラ饅頭　信子
[ウ] 口笛のメロディー犬の蹤いて行き　秋景
　愛撫の期待胸の高鳴り　欅
何も彼も忘れ果てたる不貞妻　秋
　とんでる「万智」にたじたじの人　欅
青空に雪加がＡＢＣを描き　清
　薄暑の幣を風の揺すりぬ　郁
[ナオ] 領巾振りし呼名の浦の姫の恋　信
　新婚旅行穿きしジーパン　秋
ブランデーリキュールワイン取りまぜる　欅
　美は乱調にありや否やと　同
北国の稲架木を照らす冬の月　秋
　即身仏に寒き蠟涙　信
[ナウ] 呆け除けに連句ワープロ碁に散歩　郁
　芋棒の店友と連れ立つ　同
蛇の目傘花を点じて絹の雨　欅
　小流れの上春蝉の鳴く　秋

せせらぎ　原田千町　捌

せせらぎや毛呂の古里早生蜜柑　千町
　連衆揃ひやや寒の旅　庸子
月の窓作家の想を練るならん　譲介
　甘辛だんごひとつほほ張る　恵美子
[ウ] 七彩の鞠供へあり地蔵尊　庸
　薄化粧して湯上がりの君　恵
初恋の吉永小百合に似て居ると　介
　カンチュウハイをぎゅっと潰して　同
幽霊船海霧の中より現れぬ　町
　渋味も付きて贋作の壷　庸
[ナオ] 億ションに差し毛の生えし犬と住む　介
　総理候補に絡む閨閥　恵
抱き合ひ知らぬ急所を教へられ　介
　時流れゆく鴛鴦の月　庸
意地張って伊達の薄着が風邪っ引き　町
　モンマルトルの丘の手品師　介
[ナウ] 人の世の見極めがたし裏表　庸
　万愚節には孫となぞなぞ　町
莚まで枝垂るる花のとどきたり　恵
　トーテムポールに止まる蝶々　介

昭和六十二年九月二十日
於　毛呂山町松倉荘

百韻を捌いて

秋元正江

八月の日盛りの午後、庵にこもって百韻をまく、こんな風雅な消夏法があるでしょうか。

百韻をまいてみて、そこから歌仙、二十韻を見ることができたら面白いと思いました。捌くにあたり、手がかりとしたこと。

一、四つの折立の句に春夏秋冬の季を入れてみる。しかし、初折、二の折、名残の折には季が入ったが、三の折だけ、二の折の折端で冬三句となったため、雑となってしまった。

二、四花七月、恋を同趣同想にならないように気を付ける。これは練達の連衆のお蔭で助かりました。

三、折毎の変化の対応を考えたが、いまひとつ迫ることができませんでした。

連衆の短冊はひきもきらず山の如く出て、瞬間的判断力に応えられたか疑問です。五時間三〇分で首尾

捌	秋元正江	2
連衆	福井隆秀	6
	原田千町	18
	下鉢清子	15
	鈴木千恵子	10
	井手欅晴	14
	中島まさし	11
	中田あかり	12
	望月精光	5
	杉内徒司	7

百韻 青葡萄

正江 捌

(一)

弥撒の鐘なりわたりたり青葡萄　正江
　みんみん弾の静まりし庵　隆秀
風炉点前玻瑠水指の涼やかに　千町
　憩ひて子等の脊なの向きむき　清子
自転車で遠乗りをして丘の径　千恵子
　高層ビルの抉る秋空　欅晴
窓拭きの足元あやし昼の月　まさし
　溢れ蚊はらふひまも惜しみて　あかり
(ウ)めぐりきし旅は嵯峨野の初紅葉　精光
　鬚の漢のしゃぶるのしいか　徒司
弗安も模様眺めの市場なり　晴
　墨の香たてて綴る小文　清
紋綸子艶しっとりと身のこなし　町
　裕次郎びいきの祖母の年回　り
抽出に砂糖と化りてゼリビンズ　晴
　金喰ひ虫と云はる豪雪　司
つっかける厠草履に月寒く　清
　低血圧の極限にあり　り
目覚ましといふシャンプーの入念さ　恵
　約束みんなエープリルフール　し
弾き進む調べ六段花の宴　晴
　根来の杯をあけるうららか　町

(二)

(ニオ)親馬を慕ひて駈ける若き駒　光
　園にホースの水がうねうね　清
みよちゃんをお嫁にすると稚な恋　恵

(三)

(三オ)市の告示路面凸凹要注意　司
　百韻半ばワイン飲み干す　し
むかし海いま少年の夢宇宙　町

ためらひながらいつか深みに　町
国師号払子曲ろく生悟り　晴
べし見悪尉面の懸かれる　清
草枕ふと耳にせし波の音　司
ピエロがかつぐ淡い夕虹　晴
浅草でラムネサイダーらっぱ飲み　し
鳩をくはへて猫の逃げだす　町
勾配の急な坂道塀つづき　り
手をひく母の白き横顔　恵
人も寄れ我も参ぜん風の盆　晴
城址に仰ぐむらくもの月　秀
（ニウ）新走り利酒の口みつめられ　り
単身赴任電話頻繁　清
三すくみ嫁と姑と孫が寄る　町
凱旋門へクイズ当りて　し
船籍はリベリアに置きゆとりあり　清
毒の処方の亀の甲の式　町
虞美人草月に打伏す崖なりに　司
蟻の曳きゆくものをあはれむ　り
がらがらに吾子の手擦れのかすかなる　晴
ニューリーダーはベビーフェイスで　光
帰巣性少し足りないうちの犬　町
夜半の眠りを擾す凩　晴
餅花に触るれば揺らぐ炉の明り　町
集ひきたりて古書焚きあぐ　清

幽霊となり君を抱かん　し
レンタルですべて賄ふ新世帯　清
人工受精の牛に夕焼け　光
つん読の師匠今年も書曝し　晴
薬缶頭に帽子のせたる　清
ヤンピーの筏黄河を下りゆく　町
赭くむきだす土の匂ひ来　り
篝火に万作の舞ふ「釣狐」　恵
達磨づくりの忙しき秋　光
芋の子が太れば月の太りつつ　晴
胡桃ピーナツ栗鼠にふるまふ　町
（ミウ）玲瓏とカナダ帰りのイヤリング　清
寝物語にゃいらぬ通訳　恵
かのひとに似たるこの児の地蔵眉　町
篠つく雨を呑みきれぬ樋　晴
場立して波瀾ぶくみの指ひろげ　り
地下鉄のなか財布すられる　し
ほくろある日曜学校教師なり　り
ボートレースのたくましき腕　し
むらがりし鯉の魚紋に花の影　清
芹のお粥のお替りをして　町
本能寺ナイスミディのかしましく　し
「みみはなのど」と耳鼻咽喉科　晴
竜胆の濃ゆき小径に月のぼる　恵
捕へてきしが放つ邯鄲　秀

㈣
（ナオ）爽やかな音加へつつ厨ごと　清
こんな木っ端も円空の作　町
父と娘の会話この頃漫画調　秀
キャピキャピとしたＯＬが来る　恵
雪はらら氷河は薄きはっか色　町
肌を劈く銃身の冷え　晴
二合半を友とふたりで酌みかはし　秀
また減税で揉める与野党　し
はや容すこし崩れしメッシュ靴　司
気絶してみせきょうはお芝居　町
月のさす畳に愛のはじまりて　り
大鳥居まで上る鬼の子　清
忠臣の自刃の石にこぼれ萩　町
鉢巻しめてどなる癖あり　司
（ナウ）熔接の工夫の汗がとび散りぬ　し
雀がのぞく高窓の桟　り
体温の折れ線グラフも習慣に　恵
ワープロ育ちで忘る筆順　清
年金を貰ふころにはちやほやと　り
分葱胡葱育つ山畑　清
みちのくの紅粉を重ねし花ごろも　江
うつらうつらと目借り時なる　秀

昭和六十二年八月二日
於　関口芭蕉庵

二十韻三巻

還暦記念　零余子　内田麻子　捌

いつしかに零余子（ぬかご）ころころ六十年　麻子
　友の笑顔にゆれるコスモス　淑子
まぼろしの布も流れて月の川　翠子
　釣った魚はどれも大きく　蓉子
（ウ）若者は引っ越しのよなバッグ提げ　郁子
　手に手を取って成田空港　照代
別れよう地球の果てまで来たけれど　美保
　散歩の犬の鎖ときやる　淳子
青しぐれさっとすぎたる楡大樹　みづゑ
　麦酒さされて昼のほろ酔ひ　麻
（ナオ）過去形のあれやこれやの恋話　淑
　清姫めきて朱き唇　翠
蛇の道はへびと迫られ帯を解き　蓉
　曲屋の軒めぐる綿虫　郁
年守る鎮守の杜に月昇り　代
　中途半端の気の多い人　保
（ナウ）賑やかなスケボーの声にそわそわし　淳
　干鱈をあぶり番茶濃いめに　麻
明日開く花のつぼみの枝垂れたる　ゑ
　地震過ぎて又長閑なる山　翠

昭和六十二年九月二十四日
於　二子玉川富士観会館翁の間

紅葉狩　式田和子　捌

伝説の鬼無里の郷や紅葉狩　満子
　磴照らす月の皓々　和子
冬支度遅々と進まずらちもなし　志げ子
　手作り団子渋茶一服　知佐
（ウ）達筆のファックスが来て返電話　志
　紫色のシャドウつけた娘　佐
こっそりとひとり占涙雨　同
　光るなめくぢとんだところに　和
外っ国で頭脳形成ノーベル賞　満
　今日は座禅で明日御幣ふり　志
（ナオ）ねんねこの子をあやしつつ見る玉兎　満
　ひと声残し寒雁の行く　佐
血圧に頭痛肩こり婆の癖　志
　大姐御にも秘めた初恋　和
えり円の縮緬の帯とかされて　佐
　逢曳の瞳の涼しかりけり　同
（ナウ）まるまると休耕田で育つ鯉　満
　豪華ホテルで合格を待つ　同
三味線にギターも混る花莚　志
　人垣立ちて春宵に酔ふ　佐

昭和六十二年十月十六日
於　逗子本屋邸

盆の月　豊田好敏　捌

盆の月書くことすべてまことなれ　哲
　蚯蚓鳴くなり独り居る夜　和子
すすきの穂手に児らのはしゃぎゐて　亀
　ゆっくり廻るダンプクレーン　和
（ウ）大川は水嵩増して滔々と　好敏
　売れっ妓芸者二階座敷で　哲
おくれ毛の汗ばむ頬にひたとつき　亀
　白いショーツで青梅マラソン　和
マイケルを無理にも見むと坐り込み　亀
　裏の祠に棲みつきし猫　哲
（ナオ）湯豆腐のくつくつたぎる赤銅壷　和
　下着泥棒嫌ふ凍て月　敏
あなただけあなたしかないあなたの子　亀
　ピルを頼りに北欧の窓　哲
寄宿舎に語りつがれた七不思議　凡
　酒をあふりて随徳寺決め　和
（ナウ）かっぽれを身過ぎ世過ぎの種にして　哲
　一人静の風に舞ひ散り　恭子
花便りふるさとの香のほんのりと　亀
　魚釣る峡に小綬鶏の声　鈴

昭和六十二年八月十日
於　渋谷連句会

連句会案内

❁連句教室
日　時　第一日曜日　午後一時～五時
会　場　関口芭蕉庵
　文京区関口二ノ一一ノ三
　（電）九四一－一一四五

❁柏連句会
日　時　第三日曜日　午後一時～五時
会　場　光ケ丘近隣センター
　（南柏駅よりバス　光ケ丘団地マーケット下車）

❁A・C・C連句・理論と実作
日　時　第二・四水曜
　午後一時～三時
会　場　新宿住友ビル四十八階
　朝日カルチャーセンター
　（電）三四四－一九四一（代表）

❁猫蓑会（会員制）年四回
（一月・四月・七月・十月　第三水曜日）
会　場　松声閣
　文京区新江戸川公園内
　（電）九四一－九六四九

雁帛往来

▽九月十九日、豊田好敏氏に正式俳諧執筆の作法を光ケ丘近隣センターで教える。先輩式田和子氏・中川哲氏も応援。
▽九月二十日、柏連句会主催毛呂山松倉荘に吟行。柚はまだ青かったが、御主人の秋葉暁江氏を加え、二十韻四卓首尾。（本文参照）
▽九月二十九日、集英社「日本詩歌大系」の原稿を書き終り投函。
▽九月三十日、草間時彦氏の鴫立庵入庵を祝し、二十韻七卓満尾、後プリンスホテルで祝賀会。（本文参照）
▽十月三日、名古屋の俳誌「耕」へ原稿送る。
▽十月十日、東京義仲寺主催の時雨忌に出席。加藤三七子・山田みづゑ両女史の講演を聞き、歌仙興行一巻首尾。
▽十月十一日、俳句文学館で草間時彦氏主催の五吟歌仙を興行。
▽十月十六日、俳句文学館主催の俳句講座、二十三日講義の予定が他の講師の都合により交替。「連句の世界」という題にて講演。
▽十月十七日、時雨忌正式俳諧の練習を深川の芭蕉記念館で挙行、三時ごろ終って、「ティファニー」でお茶を飲み、「みやこ」で深川丼を食って帰る。余興二十韻一巻首尾。
▽十月十九日、富士ビル丸の内画廊に斉藤吾朗氏の個展を見、それより俳句文学館に行き武翁賞選考。
▽十月二十日、俳句文学館図書委員会々員の委嘱あり、受諾。

季刊「連句」　第十九号
昭和六十二年十二月一日発行
編集人　東　明　雅
発行人　東　明　雅
季刊「連句」発行所
〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ三　東方
電話　〇四七一（七五）一一九二
振替口座　東京七－五二一三三
印刷所　㈲岩田印刷所
〒277 柏市豊住一ノ一ノ二
電話　〇四七一（七四）〇一八三
定価　一部　五〇〇円　送共
　　　一年　二〇〇〇円　送共

連句辞典

東　明雅・杉内徒司・大畑健治編

再版　B6判　三五二頁　三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉挙句　会釈　一座一句　有心　打越　思いなし　表八句　懐紙　歌仙　軽み　切字　景気　五句目　差合　去　式目　四春八木

〈人名篇〉天野雨山　伊藤松宇　上田聴秋　鶉沢四丁　小林見外　下平可都三　関為山　高橋玄一郎　高浜虚子　中村俊定　野村牛耳

俳句鑑賞辞典
水原秋桜子編　二三〇〇円

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

現代俳句鑑賞辞典
水原秋桜子編　二八〇〇円

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

季語辞典
大後美保編　二八〇〇円

日本の季節にまつわる言葉をスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

難解季語辞典
中村俊定監修　四五〇〇円

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

- 国語学大辞典　国語学会編　B5　一九〇〇〇円
- 国語慣用句大辞典　白石大二編　A5　六八〇〇円
- 国語慣用句辞典　白石大二編　B6　二二〇〇円
- 国語史辞典　林巨樹他編　B6　三五〇〇円
- 日本語 語源辞典　堀井令以知編　B6　一八〇〇円
- 京都語辞典　井之口・堀井編　B6　一八〇〇円
- 擬音語擬態語辞典　天沼寧編　B6　三五〇〇円
- 隠語辞典　楳垣実編　B6　三八〇〇円
- 近世上方語辞典　前田勇編　A5　一五〇〇〇円
- 花柳風俗語辞典　藤井宗哲編　B6　二三〇〇円
- 明治大正 新語俗語辞典　樺島忠夫他編　B6　三八〇〇円
- 難訓辞典　中山泰昌編　B6　三二〇〇円
- 名乗辞典　荒木良造編　B6　二八〇〇円
- 名数数詞辞典　森睦彦編　B6　四五〇〇円
- あいさつ語辞典　奥山益朗編　B6　二八〇〇円
- 新版 ことば遊び辞典　鈴木棠三編　B6　五八〇〇円
- 類語辞典　鈴木・広田編　B6　二八〇〇円
- 類義語辞典　徳川・宮島編　B6　二三〇〇円
- 表現類語辞典　藤原与一他編　B6　四八〇〇円
- 新版 文章表現辞典　神鳥・村松編　B6　二九〇〇円

101東京都千代田区神田錦町3-7　**東京堂出版**　電話03―233―3741～2